



刈谷市歴史博物館

■刈谷に新博物館オープン

刈谷の歴史に親しみ、見て、触れて、体験して学ぶことができる施設として、平成31年3月24日に刈谷市歴史博物館が開館しました。

当館は、刈谷城跡である亀城公園の周辺に位置しており、構造は鉄骨鉄筋コンクリート造(一部S造)2階建てで、その屋根には三州瓦、壁には瀬戸産のレンガが使用され、歴史的景観との調和を図るようにデザインされています。

また、館内には、歴史ひろば(常設展示室)、お祭りひろば(祭り展示室)、企画展示室の3つの展示室のほか、歴史博物館で所蔵している資料や図書を閲覧することができる資料閲覧室などを備えています。地域にある歴史資料のほか、全国に散在する刈谷に関係する資料を収集・調査し、展示により紹介します。

目次

●第43回東海三県博物館協会研究交流会の報告	2
●平成30年度愛知県博物館協会博物館職員等研修会	4
●平成30年度部門別研修会の報告	
研修会1	6
研修会2	8
●表紙館のご紹介	11

第 43 回 東海三県博物館協会研究交流会の報告

本年度の交流会は平成 30 年 10 月 19 日（金）、飛騨高山まちの博物館を会場に開催され、三県合計 52 名（うち愛知県 9 名）が参加した。

<内容>

○あいさつ 13：00～13：15

岐阜県博物館協会会長 若宮多門氏

高山副市長 西倉良介氏

○事例発表テーマ①「ミュージアムレスキューの現状と今後」

13：15～14：00

「ミュージアムレスキュー活動に向けての一步～岐阜県博物館協会もの部会の事例から～」

岐阜県美術館 副館長兼学芸部長 正村美里氏

「愛知県におけるミュージアムレスキューの現状と今後」

愛知県美術館 副館長 古田浩俊氏

「三重県における自然災害時の博物館等によるネットワークの現状」

三重県総合博物館 学芸員 間瀬創氏

14：00～14：20

ディスカッション

○事例発表テーマ②「小規模館だからこそできる取り組み」

14：30～15：50

「小さな飛騨市の施設が持つ課題と解決への道筋」

飛騨市教育委員会 三好清超氏

「鳳来寺山麓にある小さな博物館の 55 年」

鳳来寺山自然科学博物館 館長 加藤貞亨氏

「松阪市立歴史民俗資料館の取り組み～立地・地域性を活かして～」

松阪市立歴史民俗資料館 学芸員 杉山亜沙佳氏

「小さいとこネットの活動とこれまでの経緯」

「小規模ミュージアムネットワーク」事務局、高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川） 主任学芸員 高田みちよ氏

15：50～16：20

ディスカッション

○次年度開催県あいさつ

三重県博物館協会

<概要>

今年度の東海三県博物館協会研究交流会は二つのテーマで開催された。一つは、地域資源の保全と救済活動に関し、各県の体制づくりや手法の現状を共有することで、県を越えたミュージアムレスキューに向けた足がかりとした。二つ目は、小規模館で行われている魅力的で個性的な活動を取り上げ、博物館の今後について検討した。

テーマ①について、岐阜県の正村氏からは、岐阜県博物館協会におけるミュージアムレスキューに向けた体制作りと現在の活動について発表があった。博物館資料の保存・活用を中心に活動している「もの部会」が、レスキューにおいて中心的な役割を果たすという。また、実際に関市の豪雨被害で被災した写真を洗浄するために、多くの学芸員がボランティアとして参加した。

愛知県の古田氏からは、愛知県博物館協会が実施している災害対策として、県内を地域でブロック分けし、各ブロックの代表館を核とした非常連絡訓練を紹介した。また、現時点での成果と今後の課題を発表した。

三重県の間瀬氏からは、三重県博物館協会における災害時の体制と今後の課題について発表があった。三重県博物館協会と三重県教育委員会、みえ歴史ネットの三団体が災害時に協力する体制をとっており、さらに三重県総合博物館を情報共有のハブとし、備蓄を始めるなどの活動が進められている。

事例報告後には、発表者に向けて質疑応答が行われた。積極的な質疑があり、有意義であった。

テーマ②について、岐阜県の三好氏からは、飛騨みやがわ考古民俗館における活動について発表があった。宮川町の出土品を中心とした飛騨の民俗資料を収集し、ひとつの地域における変化を比較できることが特徴だ。外部の人にも協力を依頼することで人手不足を解決している。

愛知県の加藤氏からは、鳳来寺山自然科学博物館における活動について発表があった。友の会やボランティアと連携した活動や、地域に密着したテーマ展示、手書きの「はくぶつかんだより」の発行など、長い時間をかけて積み上げられてきた地域との連携が現在の活動につながっているという。

三重県の杉山氏からは、松阪市立歴史民俗資料館における活動について発表があった。松阪という歴史あるまちの特性を活かし、その魅力を発信する企画展を地元の方たちと連携して開催している。展示資料の借用だけでなく、地域の歴史や文化に対する知識や情報も得ているという。松阪城という立地を生かした展示やPR活動も行うそうだ。

「小規模ミュージアムネットワーク」事務局の高田氏からは、年に一度開催している「小さいとこサミット」について報告があった。小規模館が抱えている問題や課題、取り組みを全国各地の博物館ないし学芸員が共有することで、これからの活動に生かしていくという。

事例報告後には、発表者に向けて質疑応答が行われた。小規模館での取り組みについて、発表者間での意見交換も活発であった。今年度の東海三県博物館協会研究交流会は、防災において三県がどのように連携するのか、どのような対策を各県が行っていくべきか互いに刺激を受けることができた。また、小規模館だからこそできる取り組みを、多くの博物館関係者が知る良い機会となった。

(愛知県美術館 学芸員 由良渥)



テーマ①ディスカッション

平成 30 年度愛知県博物館協会博物館職員等研修会の報告

平成 30 年 12 月 18 日に、平成 30 年度愛知県博物館協会博物館職員等研修会を開催した。その状況について報告する。

この研修会は、平成 31 年 3 月 24 日に開館する刈谷市歴史博物館を会場に、「新・文化財保護法とミュージアム」をテーマとして開催し、合計 107 名（うち記念講演講師 1 名）が参加した。

<開催日時> 平成 30 年 12 月 18 日（火）13：30～17：00

<会場> 刈谷市歴史博物館（刈谷市逢妻町 4 丁目 25 番地 1）

<内容>

○あいさつ 13：30～

加藤隆司氏（刈谷市歴史博物館 館長）

○記念講演 13：40～14：40

「新・文化財保護法とミュージアム」

宇田川滋正氏（文化庁 文化資源活用課 文化財保存科学室 文化財調査官）

○事例報告 14：50～15：10

・事例報告 1 「愛知県美術館の改修について」

講師：栞名彩香氏（愛知県美術館 保存担当学芸員）

・事例報告 2 「刈谷市歴史博物館の開館に向けて」

講師：長澤慎二氏（刈谷市歴史博物館 学芸員）

○トーク「新・文化財保護法とミュージアム」 15：20～15：40

登壇者：宇田川氏、栞名氏、長澤氏、西村拓真（新城市鳳来寺山自然科学博物館 学芸員）、一田昌宏（豊橋市自然史博物館 学芸員）、田村（司会）

○刈谷市歴史博物館視察 15：50～17：00

案内：長澤氏、河野あすか氏（刈谷市歴史博物館 学芸員）

○閉会 17：00

<概要>

文化財とは、私たちの暮らしに密接にかかわってきたものであり、その地域に根差した大切な財産である。

文化財保護法は、昭和 25 年に発生した「法隆寺金堂壁画の焼損」を機に制定され、以来文化財の保存と活用を担う私たちミュージアムにとって活動の根幹ともいえるべき重要な法律である。同法は、文化財の更なる活用を目指し、その地域において、総合的かつ計画的に活用されることを目的に改正され、平成 31 年 4 月 1 日に施行される。

この研修会は、メインタイトルを記念講演とし、「ミュージアムと保存」に造詣の深い文化庁の宇田川氏を招聘し、新・文化財保護法の概要とミュージアムとの関わりについてお話をいただいた。

新・文化財保護法では、国が策定していた「文化財活用の大綱」は都道府県により策定することとなり、市町村はその都道府県による大綱より文化財の活用計画を策定し、国の認定を受けることで文化財活用ができる、というものである。

また、「公開承認施設」制度についても話され、この承認を受



記念講演（宇田川氏）

けたミュージアムとしての利点、国宝、重要文化財等指定文化財の公開事例なども紹介され、刈谷市歴史博物館における事例も紹介された。

愛知県美術館の栗名氏より、公開承認施設である同館の改修工事及び日常的な「予防的保存活動」を紹介された。改修工事における環境整備、清掃活動の事例からは、日ごろ気付かないチェックポイントを再考する契機を得たほか、定期的なモニタリング調査をはじめとする I P M（総合的有害生物管理法）活動の事例から、保存環境を構築させるために必要なデータを蓄積させるだけでなく、データの可視化等により職員同士の情報共有と、緊急時の危機感の共有など、予防的保存活動の仕組みづくりに繋がるヒントも得ることができた。

刈谷市歴史博物館の長澤氏から、同館の竣工から 3 月 24 日の開館までにおける館での経緯と今後の計画について報告された。内容は、同館の設置概要、館の立地条件、開館までの職員配置数の変化、前収蔵場所からの資料の移動に際しての環境整備に関する課題、館の竣工後に発生した予想外の課題とその対応策、公開承認施設を目指す上で文化庁から受けた指導内容など具体的なものであった。また、この後の館の視察より、視覚的なイメージも得ることができた。

トークでは、講師、事例報告者らが登壇し、講演、事例報告を振り返りながら、文化財の活用、公開承認施設、新築、改修、館の老朽化、今後の対策などをテーマとした論の展開を試みた。また、会の開催前日に実施した「ミュージアムと保存」アンケートの回答結果（53 館）も披露し、各加盟館が抱えている課題を例示しながら、参加者らと質疑応答を進めながら情報共有をした。

なお、アンケート回答より、資料保存を知る学芸員が配置される館（学芸員資格取得の新課程に必修の「博物館資料保存論」受講者も含む）は回答館全体の 4 割であった。これを踏まえ、県内で普及される地域ブロックあるいは展示内容の近い関連館同士での展示、保存活動における情報の共有、さらには館相互の連携により、非常事態への対応策などを構築するとともに、予防的保存活動の重要性を伝えてトークをまとめた。



刈谷市歴史博物館内の視察（展示室）

次いで、刈谷市歴史博物館の展示室及び収蔵庫、資料整理室やトラックヤードなどの開館準備中の現場を見学し、参加者とともに新しい館の風景を見た感動も共有した。が、それ以上に事例報告の内容を振り返った内容の質問を多く聞き、アンケート回答にも記載の多い「施設の老朽化」はじめ、加盟館全体で直面される重要課題の一つであると感じた。

今後、事業計画、予算確保、事業実施などを進めていく私たちにとっても、間もなく開館する刈谷市歴史博物館や改修された愛知県美術館の事例内容は大変参考となった。また、文化財とミュージアム、展示と保存、活用を検討する中で得るべき情報、問題意識等を見出し、参

加者同士で情報を共有する契機となれば、と期待する。

<謝 辞>

このたびの研修会の開催に際し、その準備から実施、施設の見学に至り全面的なご協力をくださった刈谷市歴史博物館の皆様には厚くお礼を申し上げます。

（愛知県陶磁美術館 主任学芸員 田村哲）

本研修会では資料の活用について、特に郷土資料等をテーマに開催した。近年では昭和の戦後以降の資料も文化財として扱われるようになってきている中、一般家庭における世代交代に伴う蔵壊しや遺品整理により、地域の博物館への資料寄贈が増加傾向にある。その一方で整理作業が追い付かず、収蔵スペースに対する資料の飽和状態や、資料の活用まで踏み込めていない館が多数あるのではないかと想定された。そこで今回は郷土資料等の活用に積極的に取り組んでいる館の事例を学ぶことで、各館における解決策を見出す機会としてもらうべく、本研修会を開催し、当日は 37 名の参加を得た。

講演「昭和日常博物館における資源化の試み ― 事業の展開と展示」

市橋芳則氏（北名古屋市歴史民俗資料館「昭和日常博物館」館長）

市橋氏からは先ず、北名古屋市歴史民俗資料館の前身となる師勝町歴史民俗資料館開館から、館としての方向性を転換し、昭和 30 年代に特化した展示と回想法への積極的な取り組みを行うようになった現在に至るまでのお話を頂いた。1990 年に前掲の師勝町歴史民俗資料館が開館し、地域の歴史を伝える資料館としての役割を果たしていた。しかし当時の世相は、昭和 30 年代からの高度経済成長により人々の暮らしが劇的な変化を遂げた一方、モノが溢れた消費社会となっていた。このままゴミとして燃やしてしまえば当時を伝えるモノが全て消えてしまうことを憂い、地域に根差した資料館として何が出来るのかを模索し、昭和 30 年代の資料を中心とした資料を収集することで当時の文化を伝えていく活動を始めた。



市橋芳則館長

同館では昭和に特化した資料収集と企画・常設展示を開催したことで、年間入館者数が一挙に増加し、今では年間 4 万人程が訪れる館となっている。そして大きな特徴としては回想法への取り組みであり、館所蔵の資料で貸出キットの作成や回想法スクールなどを設け、医療・福祉分野と連携して市として実施している。回想法スクールは、回想法センターや地域にある施設を会場として年に数回開催し、参加者が様々なテーマのもとに昔のモノを利用してそれにまつわる思い出を話し、聞き合うものである。回想法センターは昔の学校の教室を再現し、高齢者施設や地域住民などの団体客が利用しており、回想法を通して医療・福祉の分野と連携している。北名古屋市では回想法を行える施設として、先ず核となる昭和日常博物館と旧家を利用した旧加藤家住宅、倉庫を活用した回想法センターの 3 つが存在し、相互に関係している。統計によれば回想法に実際に参加した人の医療費は、取り組みを始めてからは減少傾向にあり、本人自身も元気になったと感じているようである。ただこれらはあくまでも予防であり、市として介護予防、認知症予防、地域づくりを目的に実施していると言う。連携は福祉分野に留まらず、県外にも職員が出向いて行う資料のサテライト展示や地域の美術大学とも連携し、様々なプロジェクトを実施している。

上記のような活動を展開している北名古屋市歴史民俗資料館であるが、年間 4 万人にも及ぶ入館者数内訳は団体ではなく、個人客の方が多いと言う。特に休日は 3 世代や若者だけでくる客も多く、懐かしさやレトロなものへの憧れ等、展示や資料の活用の工夫により、様々な世代からの需要を獲得した館と言えよう。

事例報告「豊田市郷土資料館における民俗資料展示の現状について」

名和奈美氏（豊田市郷土資料館学芸員）



名和奈美氏

名和氏には豊田市郷土資料の概要や町村合併により収蔵資料数が増加したことへの対応や、同館において近年、開催した民具に関する展示のご報告を頂いた。豊田市では平成 17 年の町村合併により市域が一挙に広がり、旧町村が所蔵していた郷土資料（約 25,000 点）も加わり、当時の収蔵資料総数は約 67,000 点となった。そのため収蔵スペースの問題が発生し、利用されなくなった廃校などを収蔵庫として再利用したものの、現在では既にその 9 割方が埋まっている。また受け入れ時は資料の内容調査や台帳登録などを改めて行っており、非常に多くのご苦労があったという。しかし台帳登録などの基礎整理を行えたか

らこそ、資料の見える化が図れ、今後の活用に繋がっていくと考えているという。

同館では市内小学校 3 年生が社会科の単元で実施する学習の内容に合わせて、同時期に民具に関する展示を開催している。近年では同館開館 50 周年記念の企画展示として、50 年前の暮らしに関わる展示や、唐箕^{とうみ}に焦点を当てて地域や時代により形が異なる資料 50 点を一挙に展示するなど、毎年テーマを変えて行っている。名和氏はこうした数多くの展示を行っていく中で、改めてどのような資料を収集してコレクションを形成し、館の見せたいものや強みにしていくかの大切さを感じたと言う。同館ではコレクション形成や収蔵スペースの課題に対し、まずはモノの年代や種類などの情報から、そのものに対してどんな思い出やストーリーがあるかを記録し、これを受入基準の 1 つとしていくと言う。

視察「展示とオリジナル展示ケース・展示台の展開」

伊藤明良氏（北名古屋市歴史民俗資料館「昭和日常博物館」学芸員）

伊藤氏には北名古屋市歴史民俗資料館の展示室について、特に展示の見せ方のご説明を頂いた。同館は 1990 年に開館しており、施設修繕をしながら現在に至っているという。開館以来の仕様では見づらかった展示ケースなどを改修し、ケース内にも食器棚のように段を作ることによって展示スペースを確保したり、ケース枠にテープを貼ったりすることで施設のイメージを大きく変えている。また展示室内にあえてものを多くすることで収蔵庫の容量を少なくしたり、昔の小学校の教室で使用されていた椅子を展示すると同時に、実際に座って休憩したりできるようになどのアイディアの詰まった展示室となっている。

他にも種々の工夫を凝らして年間入館者数が 4 万人となる同館であるが、昨年度は観光バスツアーの目的地の 1 つとなったこともあり、年間来館者数は 6 万人になった。同館の魅力と北名古屋市の立地、職員の展示に対する熱い意欲と情熱が相まっての結果と思われる。館としてコレクション形成の方向転換という大きな転換期を乗り越え、現在も工夫を重ね続けている同館の姿勢が館の魅力となり、多くの人々が訪ねているのではないだろうか。現在でも昭和に特化して資料収集を行っている館は決して多くはないが、こうした館が存在することで、昭和の戦後における文化の発展を将来へ伝えていくことが出来るのではないかとと思われる。



視察の様子 右・伊藤明良氏

（東海市立平洲記念館・郷土資料館 学芸員 安津由香里）

研修会2 「資料の収蔵について」

開催日：平成31年3月13日（水）

平成31年3月13日（水）に、トヨタ産業技術記念館において部門別研修会2「資料の収蔵について」が行われた。近年では多くの博物館が開館から年月が経過したことで、資料の収蔵に問題を抱えている。そのため、今回の研修では博物館における資料の収蔵状況の改善を目的として開催し、41人が参加した。また、研修会に先駆けて事前アンケート調査を行い、当日は積極的な取り組みをしている加盟館による事例報告を行った。

事前アンケートの結果報告 王雅寧氏（博物館明治村 学芸員）

王氏からは、研修会に先駆けて愛博協加盟館へ行ったアンケートの結果報告を受けた。全加盟館118館の内、70館からの回答があった。その内訳は歴史系館42館、美術館20館、自然・技術系館8館であり、各館からの回答は上記3系統のいずれかに分類されている。

まず、「整理基準」については、3系統のいずれにおいても「収蔵品の分類別」が一位を占める結果となった。「整理基準の理由」については、歴史系館および自然・技術系館では「管理のしやすさ」を挙げたが、美術館ではそれに加えて、「スペースの有効活用」も多く挙げられており、系統別に差異がみられる結果となった。「収蔵状況」については系統を問わず、多くの館で「飽和状態」であるとの回答がみられた。また、空調をはじめとした設備の経年劣化について触れている館も多くあり、博物館全体でみても、資料を保存・管理していく上で厳しい状況にあるといえる結果であった。



王氏によるアンケート結果報告の様子

事例報告1 田村哲氏（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）



田村氏による事例報告の様子

田村氏には、「やきもの資料の収蔵－色分け、数値化、データ活用など－」をテーマとした資料整理の方法についてお話をいただいた。愛知県陶磁美術館の各収蔵庫はそれぞれ色分けがされており、棚にも数字が割り振られている。こうすることで、色と数値による資料管理が可能となるという。具体的として、「青緑色のタグ・4-07-011」と記してある資料は、「第4収蔵庫（青緑色）・第07列目の棚、欄列010の最上段」となり、どこに収蔵しているものを視覚で判断することが可能となるのである。また、クラウドシステムを活用した資料データ管理も併用することで、誰でも簡単に資料を探すことができるように対応を進めているとのことであった。

事例報告 2 地村佳純氏（碧南海浜水族館 副館長）

地村氏からは、「水族館における魚類標本の収集および管理方法について」と題して、魚類の標本管理と収集段階に焦点を当てた報告をしていただいた。碧南海浜水族館では、標本を受入年数別の連番によって管理しており、1年間の受入件数を一目で判断できるようにしている。また収蔵スペースを確保するため、資料収集の基準を定めている。1. 地元の生き物のみ、2. 大型標本は扱わない、3. 採集データが無いものは受け入れない、の3点である。また例外として、学校や他の資料館からの資料については、資料を確認して受入の可否を判断している。施設として「身の丈にあった」資料収集を心掛けることで、しっかりした管理体制の確立を目ざしているというとのことである。



地村氏による事例報告の様子

事例報告 3 一田昌宏氏（豊橋市自然史博物館 学芸員）



一田氏による事例報告の様子

一田氏からは、「企画展に絡めた大規模収蔵庫整理－重量パレットラック導入による大型標本の立体的収蔵－」というテーマで報告していただいた。豊橋市自然史博物館では、収蔵庫内における有効な空間利用を図るべく、企画展における大型標本の展示期間中に、工業用の大型ラックを導入、収蔵品の整理を行った。ラック導入にあたり、まず重量 100kg を越える大型標本を含めた収蔵庫内の資料を廊下へ出し、導線と設置スペースの確保を行った。この際は、小型フォークリフトを活用したという。ラック設置後は、大型標本と小型標本をそれぞれ収納したことで、収蔵庫内に作業空間を確保し、資料整理の効率化を図ることができたとのことである。

事例報告 4 山田佳美氏（豊田市郷土資料館 学芸員）

山田氏には「災害時の資料避難を見据えた収蔵庫整理の取組」というテーマで報告をいただいた。豊田市郷土資料館では市内の使用していない施設を収蔵庫として使用している。しかし空調や交通アクセスの不備、虫害の懸念などの資料管理における問題や、水没の危険性がある施設もあることから、災害時における資料避難を見据えた資料整理を行っている。収蔵資料の棚卸しと資料の住所決めを行い、災害時に優先的に避難させる資料の選定と避難させる資料の箱・棚板への色付を行うことで、学芸員に限らず一目で資料避難が可能な状況となるように整理を進めている。



山田氏による事例報告の様子

また、豊田市では新博物館の開館を進めていることから、新博物館への資料移管も視野に入れた整理を行っているとのことである。

事例報告5 木村雅人氏（トヨタ産業技術記念館 学芸員）



木村氏による事例報告の様子

木村氏には「トヨタ産業技術記念館における展示資料保存の現状と取組み」と題した報告をしていただいた。トヨタ産業技術記念館は、旧豊田紡織本社工場の建物を利用して、1994年に開館した。同館の特徴として、常設展示物は複数のトヨタグループが所有しており、管理が複雑になっている点が挙げられる。また展示場が保管場所となっているため、常設展示物は収蔵庫を持たないとのことである。このため、常設展示物は数字とアルファベットによる碁盤目の「番地」により所在地を管理されている。

特別収蔵庫の資料についてはその材質も様々であることから、収蔵庫内の温度・湿度は、各資料を保管する上での最大公約数的な数字に設定されている。また収蔵棚についても「番地付け」を行うとともに、中性紙箱による保管、地震対策として防護ネットが設置されている。また現在は、デジタルアーカイブス構想を進めているとのことである。

トヨタ産業技術記念館・常設展の見学



常設展見学の様子(エントランスロビー)

トヨタ産業技術記念館では、多くの繊維機械や自動車機械が展示・動体保存されている。また係員が実演を行うことで、来館者が道具や機械の仕組みを理解するだけでなく、興味・関心を持つことにも一役買っている。機械の動きと人の動きを通じて、技術の歴史と進歩も学ぶことが出来るため、もう一度足を運びたいと思わせるような魅力ある展示であった。

博物館における資料収蔵については、多くの館で適切な管理が困難な状況であることを、改めて認識する研修内容となった。博物館として取り組むべき課題であるものの、施設の拡張には多額の費用を要するなど、理解を得られない部分も多く、根本的な解決を図ることは難しいのが現状である。そのような中で、今回の研修会は各館における現状の認識と今後の課題への一つの指針になりえるのではないだろうか。事例報告をしていただいた各館をはじめ、アンケートに回答いただいた各館の取組みを学ぶことができた、意義のある研修会であった。

（蟹江町歴史民俗資料館 学芸員 花井昂大）

表紙館の御紹介

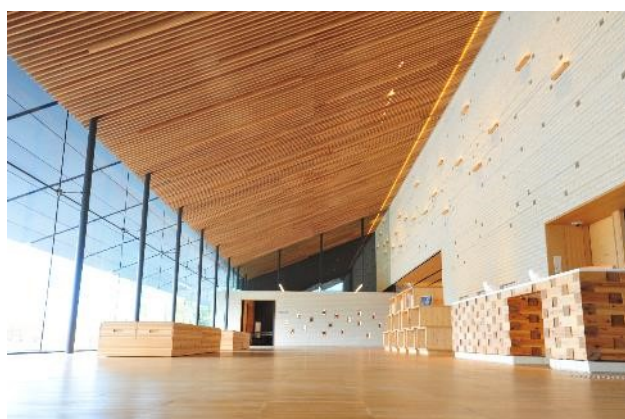
刈谷市歴史博物館

◆開館記念展のご案内

初代刈谷藩主 水野勝成展 ～「鬼日向」のいくさとまちづくり～

会期：3月24日（日）～5月19日（日）

刈谷藩の初代藩主である水野勝成は「鬼日向」の異名でも知られるように、武勇の面で注目されてきましたが、実は内政面でも実績を挙げています。本展では水野勝成の武勇に関する資料を展示するとともに、福山（現在の広島県）藩主としての城下町開発に関わる資料も取り上げ、内政で発揮された優れた手腕についてもご紹介します。



豊田自動織機 G3 型

【開館時間】

9：00～17：00

【休館日】

月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）、祝日の翌日、年末年始など ※4月30日（火）臨時開館

【観覧料】

歴史ひろば（常設展示室）：どなたも無料です

お祭りひろば（祭り展示室）：どなたも無料です

企画展：展覧会によって異なります

【所在地】

〒448-0838 刈谷市逢妻町4丁目25番地1

【交通手段】

* JR 東海道本線逢妻駅・名鉄三河線刈谷市駅から徒歩
約15分

* 刈谷市公共施設連絡バスで刈谷市駅から約10分
（「刈谷市体育館」下車）

逢妻駅南口から同バスで約5分（「刈谷市体育館」下車）

【お問い合わせ】

TEL：0566-63-6100 FAX：0566-63-6108

E-mail: rekihaku@city.kariya.lg.jp

<https://www.city.kariya.lg.jp/rekihaku/>



「愛知の博物館」 No.109

発行日 平成31年3月29日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒461-8525

愛知県名古屋市東区東桜 1-13-2

愛知県美術館内 TEL. 052-971-5511